本古典集成

源氏物語

八

石田穣二　清水好子　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第六九回）

源氏物語（げんじものがたり）八

昭和六十年四月一日　印刷
昭和六十年四月五日　発行

校注者　石田穣二（いしだじょうじ）
　　清水好子（しみずよしこ）

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
　　東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

定価一八〇〇円

組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jōji Ishida, Yoshiko Shimizu, Printed in Japan, 1985.

ISBN4-10-620369-3 C0393

目次

凡例……三
浮舟……九
蜻蛉……九九
手習……一七一
夢浮橋……二五七

付録

陵園妾……二八三
系図……二八六
図録……二九〇
年立……二九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

凡例

一、本巻には、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋の四巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、浮舟は明融本を、蜻蛉、夢浮橋は大島本を底本とするが、手習は、静嘉堂文庫蔵、伝二条為氏筆本を底本とする。手習の大島本には、青表紙本として不純な点があると考えられるからである。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、

そのほか、会話には「　」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿（おほいとの）」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要のある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（　）で、主語その他、文派の指示を〔　〕によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であ

るが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解読は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、「陵園妾」、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。

一、なお、最後に年立を付載した。物語全体の構造を察し、また梗概の代用とする便宜もあろう。

源氏物語 八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

浮

舟

匂宮は、二条の院で会った浮舟のことが忘れられず、その素姓を教えてくれない中の君を恨んでいる。薫は、浮舟をいとしく思いながらも、正夫人女二の宮への憚りから、宇治を訪れることも間遠である。

年明けて正月、中の君のもとに浮舟から新年の挨拶が届けられた。その文面を見て、匂宮は、浮舟が宇治にいることを知る。さらに、薫方の事情に詳しい家臣を通じて、薫が宇治に女を囲うことも知った。その女がかの女か。わが目で確かめようと宇治を訪れた匂宮は、格子の隙間から浮舟を見届ける。匂宮は薫と偽って部屋に入り、強引に浮舟と契った。浮舟は、一途な匂宮に惹かれる。

二月、ようやく宇治を訪れた薫は、物思わしげな浮舟の様子にいとしさを増し、京に迎える約束をする。二月十日頃、宮中の詩宴に、古歌を口ずさむ薫の浮舟を思う心の深さを知って、匂宮はじっとしていられず宇治へ急いだ。今度は、対岸の小家に女を連れ出してゆっくりと二日間を過す。巻名は、この時宇治川を渡る小舟の中で浮舟が唱和した歌による。

匂宮は薫に対抗して、三月末には浮舟を京に迎えようとする。浮舟は二人の男性の間に立って苦悩する。

ある日、薫と匂宮の文使いが宇治の邸で鉢合せし、事態を知った薫は、浮舟に不倫を詰る歌を送る。邸の周辺も厳重に警戒されるようになり、訪れた匂宮も浮舟に会えずに帰らねばならなかった。

京移りを喜ぶ母や乳母のこと、さらには中の君に対しても心を痛める浮舟は思い詰めて、入水を決意する。

東屋の翌年、薫二十八歳（通説二十七歳）の年、正月〜三月のことである。

一 今でもまだ、あのほんのはかない出会いに終った夕暮れのことをお忘れになる時とてない。二条の院の西の対で浮舟を見つけたものの、乳母や女房に騒がれて思いを遂げられなかった夕べのこと。七巻東屋三〇八～三一四頁に詳述されている。

二 大した身分ではなさそうな様子だったが、女の感じは、実によかったなと。匂宮の、浮舟に対する印象。

三 中の君に対しても。

四 こんな何でもないことなのに、むやみに気をまわして、嫉妬などなさることだ。そんな方とは思っていなかった、情けない。「かかる筋のもの憎み」は、男女の仲についての嫉妬。一件以後、浮舟が二条の院から姿を消したのを、中の君が嫉妬して女を隠したのだと邪推して言う。

五（薫が浮舟を）表立って重々しい扱いはなさらないようだが。「たまはざなれど」は「たまはざるなれど」の撥音便無表記の形。「なれ」は推定。以下、次頁六行目の「……もてそこなはじ」まで中の君の思料。

六 並々ならぬ御愛着で、あの方（薫）がこっそりとお住まわせになっている人なのに。浮舟のこと。

七 仕えている女房の中でも、一時の慰みに手をつけてみようと思い立たれた者は誰でも、ご身分柄困るような女房の実家にまで追って行かれる、体裁の悪いご性分なのに。匂宮が女房に手出しをすること、東屋三一二頁に見える。

匂宮、なほかのほのかなりし夕べをおぼし忘るる世なし。ことことしきほどにはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかなと、いとあだなる御心は、くちをしくてやみにしことと、ねたうおぼさるるままに、女君をも、「かうはかなきことゆゑ、あながちに、かかる筋のもの憎みしたまひけり。思はずに心憂し」と、はづかしめ怨みきこえたまふをりは、いと苦しうて、ありのままにや聞こえてまし、とおぼせど、やむごとなきさまにはもてなしたまはざなれど、浅はかならぬかたに、心とどめて人の隠し置きたまへる人を、もの言ひさがなく聞こえ出でたらむにも、さて聞き過ぐしたまふべき御心ざまにもあらざめり、さぶらふ人のなかにも、はかなうものをものたまひ触れむとおぼし立ちぬる限りは、あるま

一　これほど月日が経つのに、深くご執着らしい人（浮舟）のことだから、女房どころでなくきっと不体裁なことを引き起されることだろう。薫との間に悶着が起るだろう、の意。

二　（薫、浮舟の）どちらに対しても、気の毒なことになるにしても。

三　（そうなれば、浮舟は血の繋がった妹のことゆえ）赤の他人よりは外聞の悪いことだなどぐらいは思うことだろう。嫉妬の思いはさらさらない、という気持。

四　困ったこととは思いながらも、本当のことはお打ち明けなさらない。

五　（そうかといって）ありもしない嘘をついて、もっともらしく言い繕ったりはおできにならないので。中の君の素直で上品な人柄。

六　何をなさるにもご大層など身分なので。薫、権大納言右大将（七巻宿木二四二頁参照）。また、北の方は内親王である。

七　神様が禁じて逢えなくなさる道より　**薫の思惑**　ももっと難儀な恋路である。「恋しくは来ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに」（『伊勢物語』七十一段）を踏まえる。

八　けれども、いずれ十分な世話をしてやる積りだ。以下、地の文から自然に薫の心中の叙述に移る。

九　（浮舟を宇治に置いたのも）山荘に行った時の慰めにと考えてのことだから。

じき里まで尋ねさせたまふ、御さまよからぬ本性なるに、さばかり月日を経て、おぼししむめるあたりは、ましてかならず見苦しきことと取り出でたまひてむ、ほかより伝へ聞きたまはむはいかがはせむ、いづかたざまにもいとほしくこそはありとも、ふせぐべき人の御心ありさまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき、とてもかくても、わがおこたりにてはもてそこなはじ、と思ひ返したまひつつ、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず。異ざまにつきづきしくは、え言ひなしたまはねば、おしこめてもの怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。

一　これほど月日が経つのに、深くご執着らしい人（浮舟）のことだから、女房どころでなくきっと不体裁なことを引き起されることだろう。薫との間に悶着が起るだろう、の意。

二　（薫、浮舟の）どちらに対しても、気の毒なことになるにしても。

三　（そうなれば、浮舟は血の繋がった妹のことゆえ）赤の他人よりは外聞の悪いことだなどぐらいは思うことだろう。嫉妬の思いはさらさらない、という気持。

四　困ったこととは思いながらも、本当のことはお打ち明けなさらない。

五　（そうかといって）ありもしない嘘をついて、もっともらしく言い繕ったりはおできにならないので。中の君の素直で上品な人柄。

六　何をなさるにもご大層など身分なので。薫、権大納言右大将（七巻宿木二四二頁参照）。また、北の方は内親王である。

七　神様が禁じて逢えなくなさる道より　**薫の思惑**　ももっと難儀な恋路である。「恋しくは来ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに」（『伊勢物語』七十一段）を踏まえる。

八　けれども、いずれ十分な世話をしてやる積りだ。以下、地の文から自然に薫の心中の叙述に移る。

九　（浮舟を宇治に置いたのも）山荘に行った時の慰めにと考えてのことだから。

薫　かの人は、たとしへなくのどかにおぼしおきてて、待ち遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやりたまひながら、所狭き身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、今いとよくもてなさむとす、山里のなぐさめと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきこ

一〇 そんな具合にして、当分の間は人に知られないような所に住まわせ、次第にそういうものだと、浮舟の気持も気長になるように仕向けておいて。そうしばしば会える間柄ではないと浮舟を納得させて。

一一 急に女を迎えられて、一体どういう人なのだろう、いつから親しくなられたのか、などとあれこれ取り沙汰されるのも煩わしく。

一二 浮舟を迎えたそもそもの思惑にはずれることになろう。浮舟は亡き大君の身代り。

一三 大君ゆかりの地をさっぱり切り捨てたように（浮舟を宇治から）連れ出して、亡き大君のことを忘れたかのように思われるのは、いかにも不本意だ。

一四（薫は浮舟を）京に移すべき所をお心積りなさって。前に「今いとよくもてなさむとす」とあった。

一五 少しお忙しくなられたようでもあるが。このところ、官位昇進、婚儀、浮舟のことと重なっている。

一六（それを）拝見する女房たちも、なぜこれほどまでにといぶかしく思うほどであるが。実の親兄弟でもないのに、と不審がる。

そうな用事をこしらえて とども作り出でて、のどやかに行きても見む、さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやうさるかたに、かの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ、にはかに、何人ぞ、いつより、など聞きとがめられむもものさわがしく、はじめの心に違ふべし、また宮の御方の聞きおぼさむことも、もとのところを際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならむ、いと本意なし、などおぼししづむるも、例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし。

一四 わたすべきところおぼしまうけて、忍びてぞ造らせたまひける。

一五 すこしいとまなきやうにもなりたまひにたれど、宮の御方には、なほたゆみなく心寄せつかうまつりたまふこと同じやうなり。見たてまつる人もあやしきまで思へれど、世の中をやうやうおぼし知り、人のありさまを見聞きたまふままに、これこそはまことに昔を忘れぬ心ながさの、名残さへ浅からぬためしなめれと、あはれもすくな

行って逢いもしよう 一〇 ゆっくりと

自分としても 世間の非難を受けないように 目立たぬようにするのが得策だろう 中の君 聞かれた時のお気持を 気持を抑えなさるのも 悠長にすぎるご性分がさせることなのであろう

中の君 [中君は]世の中のことが段々とお分りになり 亡き人のこと 世間の人の振舞を見聞きなさるにつれて 感じ入られることも一通り豊りなく好意を寄せお世話をしてさし上げなさることは今までと同様である 後々までもねんごろな例なのであろうと を忘れぬ変らぬ心の

一　案に相違した運命だったこと、亡き姉君のお考えおきになった通りにもならないで、どうしてこんな物思いの絶えそうもない結婚をすることになってしまったのだろう。中の君の思い。亡き大君は、自分の代りに中の君が薫と結ばれることを望んでいたこと、七巻総角の巻に詳しい。

二　（中の君が薫と）直接お会いになることは、めったにない。

三　歳月もたち、あまりにも昔が遠くなって、内々のご事情を深く知らぬ女房は。宇治以来の事情を知らぬ新参の女房が増えているのである。

四　さしたる身分もない、並々の者なら、それくらいの以前の付合いを忘れずに、いつまでも親しくするというのもふさわしいが。以下、女房の心中。

五　なまじこんな格式のある高い身分なのに、世間の常識に外れた交際ぶりも、気がひけるので。女房の心中からいつか中の君の心中叙述になる。

六　宿木の巻に誕生した男の子。（七巻二四三頁参照）

七　中の君以外の腹には、こんなお子も生れて来ないのではなかろうかと、（匂宮は）大切な一粒種とお思いになって。皇位継承の可能性もある男子である。

八　気兼ね入らずの親しめる夫人としては、誰よりも大切になさるので。正室の六の君は、舅の夕霧がいて気の張る相手。

りでない　薫は　お年を重ねてゆかれるにつれて

からず。ねびまさりたまふままに、人柄もおぼえも、さま異にもの

世間の評判も　格別にす

ぐれたお方なので　匂宮

したまへば、宮の御心のあまりたのもしげなき時々は、思はずなり

頼りなく思われる折々には

ける宿世かな、故姫君のおぼしおきてしままにもあらで、かくもの

思はしかるべきかたにしもかかりそめけむよ、とおぼすをりをり多

くなむ。されど、対面したまふことは難し。年月もあまり昔を隔て

ゆき、うちうちの御心を深う知らぬ人は、なほなほしきただ人こそ、

さばかりのゆかりたづねたるむつびをも忘れぬに、つきづきしけれ、

なかなかかう限りあるほどに、例に違ひたるありさまも、つつまし

「加えて」匂宮が始終二人の仲をお疑いなのも　ますますつらくお思いになり　気

ければ、宮の絶えずおぼし疑ひたるも、いよいよ苦しうおぼし憚り

どうしても隔てを置いたあしらいになってゆくのに　薫は　それでもへまでど

たまひつつ、おのづからうときさまになりゆくを、さりとても絶え

浮気な　匂宮

ず、同心の変りたまはぬなりけり。宮も、あだなる御本性こそ見

なお思いをすることもあるが　かわいらしく大きくなってゆかれるにつれて

まうきふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすけたまふままに、

ほかにはかかる人も出で来まじきにやと、やむごとなきものにおぼ

して、うちとけなつかしき方には、人にまさりてもてなしたまへば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co